

# 「満洲国」の川端康成

山 中 正 樹

## 要 旨

川端康成は、昭和一六（一九四一）年に二度、旧「満洲国」<sup>〔1〕</sup>を旅している。そのときに見聞したことが、川端の意識に影響を与え、戦中の川端の小説の題材にもなっている。満洲滞在中の書簡や、帰国後の満洲に関する川端の言説には、満洲の厳しい風土の中で暮らす日本人への共感や、「深く埋れるやうな堅忍」で満洲のために働く日本人の姿から窺える「日本の美しさ」に対する感動が記されている。それは後に、「大東亜の理想」を実現すべき「満洲国の文学」の称揚へと続いていく。本稿では、川端の満洲に関する記述を辿りながら、当時の川端の意識を探り、そこから川端と戦争の関わりについて、ひとつの側面から考

察したものである。

キーワード・川端康成・「満洲国（満洲）」・「満洲国の文学（満洲文学）」・「大東亜の理想」・「新しい国」・「建国の理想」・「五族（民族）協和」

## はじめに

川端康成は、敗戦とそれに前後する知己の相次ぐ死を契機に、日本の伝統への傾斜を強めていったと評されている。それは戦後の川端の、所謂（伝統（古典） 回帰宣言）といわれる一連の発言に顕著に見てとれるとされてきた。例えば、戦後の川端の在り様を最も端的に表現したと言われる「哀愁」（昭和三二年一〇月）には、次のような記述

がある。川端研究史においては、常に引き合いに出されており、食傷気味の感もあるが、後の考察のために引いておこう。

戦争中、殊に敗戦後、日本人には真の悲劇も不幸も感じる力がないといふ、私の前からの思ひは強くなつた。感じる力がないといふことは、感じられる本体がないといふことでもあらう。

敗戦後の私は日本古来の悲しみのなかに帰つてゆくばかりである。私は戦後の世相なるもの、風俗なるものを信じない。現実なるものもあるひは信じない。

近代小説の根底の写実からも私は離れてしまひさうである。もとからさうであつたらう。(2)

ここには、一国の滅亡を嘆く心根ばかりではなく、戦後に豹変した社会の価値観や国民の態度に対する痛烈な批判も含まれているだろう。そしてそれは、川端の日本に対する思ひの裏返しでもあつたと言えるだろう(3)。

川端は日本という国の〈滅亡〉を深く嘆き、戦後の現実社会に対して絶望していたように思われる。そうした絶望は、「私はもう死んだ者として、あはれな日本の美しさのほかのことは、これから一行も書かうとは思はない」(鳥

木健作追悼「昭和二十年十一月」という発言などにも表れている。

その川端は、戦後三年を経た時点で、自分と戦争のかかわりについて、次のように述懐している。

私は戦争からあまり影響を受けなかつた方の日本人である。私の作物は戦前戦時戦後にいちじるしい変動はないし、目立つ断層もない。作家生活にも私生活にも戦争による不自由はさほど感じなかつた。また私はいはゆる神がかりに日本を狂信し、盲愛した時のないの言ふまでもない。私は常にみづからのかなしみで日本人をかなしんで来たに過ぎない。敗戦によつてそのかなしみが骨身に徹つたのであらう。かへつて魂の自由と安住は定まつた。私は戦後の自分の命を余生とし、余生は自分のものではなく、日本の美の伝統のあらはれであるという風に思つて不自然を感じない。

〔全集 第一巻 あとがき〕、昭和二三年五月、後「独影自命」

これは戦後刊行された『川端康成全集』に付した作者自身の「あとがき」として記されたものであり、自作を振り返つての発言である。ここで川端は、自分が戦争に反対も

賛成もしなかったとして、自分が戦争には距離を置いていたと述べている。

川端の発言を額面どおり受け取っていいものかという問題も一方で存在するが、そのことについては、拙稿ですでに触れたことがある（「十五年戦争」と作家「川端康成」（覚え書き）——昭和十年代の「作品」を中心に」（『桜花学園大学人文学部研究紀要』第七号、二〇〇五年三月）。拙稿では川端のこうした姿勢を相対化し、戦中の川端の作品の記述を引きながら、川端の戦争への（無意識の）加担を指摘した上で、日本文学の中に「反逆精神」を見ていた川端の意識が、敗戦に近づくにつれて〈反戦〉へと傾いていく様を、「川端康成における〈転向〉」として論じた。

それを下敷きに本稿では、戦中に川端が「日本」に対して、どのような意識を抱いていたのかを、川端の旧「満洲国」への旅行と、そこから川端が得た印象を材料として生まれた言説の内容を辿りながら探っていくと思う。それは、なぜ川端が戦中に「戦争への加担」を思わせるような発言を行なったかの要因を考えることであり、そこには敗戦後の川端に、「戦後の世相なるもの、風俗なるものを信じない。現実なるものもあるひは信じない」と言わしめた背景が浮かび上がってくると考えるからである。

次節では、川端の旧「満洲国」滞在の概略と、「満洲」

に関わる川端の言説を足がかりにしながら、「満洲」に対する川端の印象や感慨について辿っていききたい。それは先に触れた、敗戦後の日本に対する川端の憤りを産む遠因ともなっており、戦時下の川端の創作の基底にあるものや、戦後の川端の意識を考える上で、必須のものと思われるからである。

### 一 川端康成の「満洲」旅行

川端康成は、昭和一六（一九四一）年に二度、旧「満洲国」と「北支（満洲以南の中国北部）」を旅している。『川端康成全集 第三十三巻』の「自作年譜」の「昭和十六年（一九四一年）四十一歳」の項には、その時のことが次のように記されている。

春から初夏、「満洲日日新聞」の招きによつて、呉清源一行に加はり、村松梢風とともに満洲に行く。ハルビンで一行と別れ、熱河の承德を経て北京に入る。初秋、関東軍の招きによつて、山本改造社長、高田保、大宅壮一、火野葦平と満洲に行き、黒河、ハイラルなどに飛び、一行と別れて奉天に一月ほど滞在、北京に向かう。北京に一ヶ月ほど、大連に三四日ゐて帰ると、

数日後に太平洋戦争開戦。

この時の旅程などの詳細は、妻の秀子に宛てた川端の書簡等からたどることが出来る（4）。さらに川端は、自身の「満州国」訪問の様子を、戦後、次のように振り返っている。

軍事報道班員としても私は外地に出なかった。役に立たないと視られてゐたのである。しかし、十六年の春と秋と二度、満洲から北支へ行つた。

春は満洲日日新聞の呉清源氏招待に随行、一行に分かれて後、熱河から北京にはいつた。熱河は三枝朝四郎氏の同行を得て幸ひした。秋は関東軍の招待で、故山本實彦氏、故高田保氏、大宅壮一氏が同行だった。黒河、ハイラルなどに軍用機で飛んだ。二度とも報道的な旅行記はなにも書かなかつた。四人の日本人に特に感銘を受けた。吉林のダム工場長と、吉林師範の阿部教授と、承德離宮調査の伊東氏と、満蒙毛織の社長などである。その仕事への献身振りに打たれたのだつた。

二度目の旅では、満蒙毛織の原地人を使つての事業を書くつもりで、奉天に一月ほど滞在して、工場に通

ひ、北京郊外の清河鉄工場に泊まり、張家口工場にもいくつもりであつたが、たうたう一行も書けなかつた。満洲人女工を毎日見つけかけていてもよく分からなかつた。

十一月の終り、大連に泊つてゐると、S氏が私を追い帰すやうにした。米英との開戦が間近なのをS氏は知つてゐて、私の身を案じてくれたのだつた。

#### 〔敗戦のころ〕（5）

川端は満洲を大変気に入り、二回目の訪問の際は、関東軍招待の一ヶ月の滞在期間が過ぎた後もひとり満洲に残り、妻秀子を日本から呼び寄せ、自費で滞在したほどである。はたして「満洲国」の何がそれほど川端の心を打ったのか。このことについて、川端秀子は次のように述べている。

春の満洲旅行で満洲の人たちの生き方に共感と興味を覚えていた主人は、この時の旅行（引用者注、秋の満洲旅行のこと）でいっそう創作意欲をそそられたよう、日程を全部消化した後も一人だけ残つて取材を続けました。（中略）

主人は満洲で働いている日本人の良い所をつとめて

見ようとしていました。「中略」満蒙毛織の仕事に興味をもち、あちこちの工場をたずねようと考えて滞在をのばしたというわけなのです。働き生きる希望のないように見える現地の人々に、働くこと、お金を自分の手で稼ぐことを教える仕事はすばらしいことだよ、と主人は私にもよく申しておりました。

（『川端康成とともに』、註（4）に同じ）

秀子の証言にもある、川端の「創作意欲」の高揚については、川端本人も、秀子宛の書簡の中で次のように述べている。

一四三 昭和十六年四月二十四日附 新京第一ホテル  
川端康成より神奈川縣鎌倉市二階堂三三三川端秀子あて

見るも聞くもすべて小説の材料といふ気がする。今度はだめだが、ゆつくりと来て書きたい。

このような満洲を舞台にした作品の構想については、他の書簡にも、

一四四 昭和十六年四月二十八日附 承德ホテル川端  
康成より神奈川縣鎌倉市二階堂三三三川端秀子あて

明朝北京に向ふ。「中略」新京では二十人も見送つてくれ、盛大でをかしい程だった。吉林の衣家柱君は僕の再びの訪れを実に喜んでくれた。初段の事も喜び、いい事をしたと思つた。一粒の種をまいたわけだ。文学のほうでも渡満の土産はのこした。僕自身も度々来て、満洲の大きい作品を書きたいと思ふ。

と、その意欲が記されている。

この中で触れられている「衣家柱君」については、「四月十三日附」の秀子宛書簡の中に「古都吉林へ先日行き、満人と碁を打つた。二目おいて負け。」翌「十四日附」の書簡では、「碁は満人の初段が一人出来るらしい。吉林で僕がその人と打つたことから。」と記されている。

また、「文学のほう」の「渡満の土産」については、同じ「四月十四日附」書簡に「碁にも文学にも、僕の渡満土産は出来た。」とある。この「渡満土産」の内容については、「満洲国の文学」（『芸文』昭和一九年七月、満洲文藝春秋社）に、次のように記されている。

国民画報社の奥一氏が先日鎌倉に見えた時、寛城子のあの喫茶店の名を忘れたがとたづねると、ポポフだと言ふ。さうさうポポフと私は思ひ出して、その言葉の意味をただと、主人の名前だといふ。

ちやうど「満洲国各民族創作選集」の第二巻が出来上つたところで私は寛城子のロシア喫茶店も思ひ出してゐたのである。この本を出す話はあるポポフでまつまつたからだ。三年前、昭和十六年、康德八年の四月のことである。

このことは『川端康成詳細年譜』（註（４）に同じ）にも、「四月七日か、満日の筒井、満洲新聞の緑川、山田清三郎、北村らと馬車で寛城子へ行き、喫茶店ポポフで国民画報社の奥一と『満洲国各民族創作選集』の相談。」とあるように、後に発刊される『満洲国各民族創作選集』の発刊の打ち合わせのことである。川端は在満の作家達の苦勞に心を寄せており、この『満洲国各民族創作全集』第一巻・第二巻の発刊に関わる川端の発言は、後にもみるように、満洲国における満洲独自の文学の誕生を望むばかりではなく、川端の素直な心情の発露でもあったのだろう。では次に、その川端が、満洲にどのような思いを寄せていたのかについて、みていくことにしよう。

## 二 川端の「満洲」への思い

右に引いた妻秀子の証言にもあったように、川端は満洲滞在中に、「満洲で働いている日本人の良い所」に触れ、大変感動したことをいろいろなところで記している。まず、満洲滞在中の秀子宛の書簡からみていこう。

一四四 昭和十六年四月二十八日附 承德ホテル川端康成より神奈川県鎌倉市二階堂三三五川端秀子あて

熱河は杏の花盛り、春だ。東京よりやや暖かい土地だといふ。三枝さんの同道で非常に助かった。承徳のラマ寺院の修繕調査に来るのを、僕のために一日早く立つてくれたわけだ。〔中略〕離宮も寺も荒廃しつつあり、修理の金もなく、大廈の崩れるのを小指で支へてゐる程度の手入れらしい。惜しいものだ。今日午後には伊東さんの奥様の案内で町を見物、夜は会がある。この街にも読者はある。伊東さんは古跡の調査をここの五年も続けてゐる篤学者、離宮内に住んでゐる。至るところで満洲に愛を持つて調べてゐる人に会う。い日本人の多く来てゐることを知る。ロシア人も満人

も僕は実に好きになった。

このように「至るところで満洲に愛を持って調べてゐる人」に出会うことで川端は、〈内地〉ではなかなか知るこゝとが難しかったであろう、満洲在住で、満洲のために行動を続けている日本人の姿に触れ、そのことで満洲に対する良い印象を抱くようになっていったのだろう。

こうした印象は、満洲から戻った後の川端の発言の中にも度々表現されている。「満洲国の文学」（『芸文』昭和十九年七月、満洲文藝春秋社）の中から、川端の言説を拾ってみよう。

私は二度の満洲旅行の文章はつひぞ書けずにある。春の旅では「満洲国各民族創作選集」を、秋の旅では「満洲国の私たち」（協和青少年団生活記）を、この二つの年鑑の出版を内地に持つて帰つたのが、紀行文の代りのやうな記念となつた。従つて、この二書には私の個人的な愛染もまづはつてゐる。

私は満洲紀行を紙面には書かなかつたが、内心には書きつけてゐたやうに思ふ。つまり、満洲から北支への旅行の後、二年間ほど仕事がしくくて困難した。

この旅行による心の振動が強過ぎる期間だつたらうと思ふ。そのくせあわただしい素通りの旅で見聞は浮疏の悔いがあつた。

奉天から満日文化協會の三枝朝四郎氏といふ好個の道づれに恵まれて、承德ではずるぶん仕合せした。熱河古蹟特別調査所の伊東祐信氏に会へたことも、吉林で師道高等学校の阿部襄氏に会へたことと共に後々まで静かに懐しい感動を残した。言ひやうなく謙虚の若い学者が深く埋れるやうな堅忍で研究の歳月を重ねてゐるその人となりは、日本の美しさが私の胸に沁み

た。

吉林ではこの阿部教授とダムの工程処長空閑徳平氏とが絶妙の対象とし心を打つた。ダムの建設場に鉄肝の大技師長はむしろ凄爽の印象だつた。満洲国での大きい建設者のうちで私がやや近くに見たのは、この空閑処長と満蒙毛織会社長の椎名義雄氏 とだつた。それに若い純粹な学者の阿部氏や、伊東氏等の私に芸術的ともいふべき感動を与へてくれたのも、これらの人々だつた。私がその生命に羨望を覚えたのも、かういふ人達だつた。



例へば、この四人を主人とする小説などは私の制作衝動をかり立てた。今も思ひ出すと、満洲へ書きに行きたくなるが、おそらく書けずに終りさうである。

これらの発言からうかがえるのは、満洲で働く日本人の姿に、川端が深く心を打たれたこと。そうした日本人の献身的な行動や能忍の姿から受けた心象を、「芸術的感動」とまで表現し、そこに「日本の美しさ」を感じ取っていることだ。川端は、日本ではなかなか見出すことの出来なくなつてしまつた、日本人の「美しい」心根を、満洲という特別な地域において見出すことが出来たのであろう。それが、「芸術的感動」を呼び、結局実現することはなかったが、川端をして、「満洲の大きい作品を書きたいと思」わせる要因だったのであろう。

### 三 〈外地〉に暮らす人々への川端の共感

こうした川端の満洲と、そこに暮らす人々への思いは、戦中の作品にも表れている。例えば、川端の掌編小説「水」（昭和一九年一〇月、「写真週報」）は、その好例であらう。「水」は、夫の赴任にしたがつて満洲に渡つてきた若い「妻」が、水が不足する冬に、日常の些細なことから抱い

た感慨がまとめられたものである。

常思佳氏は、「川端康成「水」論——移住者の視点」（『芸術至上主義文芸』43、二〇一七年十一月）で、同作の中の、「真青い空は母国の海を思はせ、妻は若い眼を上げた」という記述などから、「母国の海のような真青い空を眺めて、止みがたい望郷の念が沸いてくる。これが当時の外地花嫁が外延的に描く「日本」という大地の想像力の範囲」であつたと指摘する。これは「妻」に風呂を借りた「隣の奥さん」が「広いわねえ。」ともらした言葉から、「妻」が「ほんたうに夫の興安嶺の観象も南洋の空までつながつてゐて、これが今の日本だ」との感慨を抱くことについて触れている。

ここには、当時の川端が抱いていた日本の版図のイメージが、国家の示すそれと等しいことを物語っており、川端の意識における植民地支配への無自覚をも示しているのだが、その問題はここでは措くとして、川端が「外地花嫁」の苦勞に思いを馳せていることは間違いないだろう。

森晴雄氏によれば、この「水」は「新女苑」の「コント欄」の「若い女性の投稿作品をもとにした掌編小説」（「水」——アジアと川端文学、『川端康成『掌の小説』論「貧者の恋人」その他』二〇〇〇年十一月、龍書房所収）であることから、特に「妻」の〈外地〉での体験が生き生きと描



かれており、そこに川端の気持ちも寄り添っているという印象を与える作品になっている。

この「水」については、堀内京氏も、「水」——作品を貫くもの」（『芸術至上主義文芸』43、同前）の中で、同作が「内地から嫁いで」満洲にきた「妻」の生活ぶりやその感慨を記したものであり、「水」という作品を貫いているものは、妻と隣の奥さんが常にもつ「故郷」つまり、「内地」「母国」への愛情であることは見逃すことができない。それは「水」の前年に発表された「東海道」において語りが体現しようとした「日本の国土に対する愛情」と共通している」としている。後で見ると堀内氏は、川端のこの頃の作品が、単に〈外地〉に暮らす人々が祖国を懐かしむという範疇を超えたものを表象していることを鋭く見抜いている。

このように、この頃の川端の作品には、〈外地〉で暮らす日本人が祖国や故郷に寄せる思いや、〈外地〉で暮らす人々への共感が見てとれるのだが、それはやはり、〈満洲〉という地を基盤にして生まれたものであり、そこには、先にみた、満洲訪問の折に出会った人々の姿に触れた感慨や、実際に満洲を旅した川端が抱いた印象が背景にあるといえるのではないだろうか。それは〈日本人〉としての素直な感動であり、〈外地〉に暮らす人々の生活ぶりに対す

る〈内地〉の人間の率直な印象であったのであり、「日本の美しさ」だったのでもあろう。しかし、社会に対して大きな影響力を持つ文学者としての川端を考えれば、事はそう単純には片付けられない。次節では、この点についてみていきたいと思う。

#### 四 川端康成の戦争への意識と〈満洲〉の位置づけ

最初にも挙げた、戦後の川端の「私は戦争からあまり影響を受けなかった方の日本人である」や「軍事報道班員としても私は外地に出なかった。役に立たないと視られてゐたのである」など、川端が戦争に積極的に関わろうとしなかったという発言に対しては、自らの発言がどれほど戦争と結びついていたのかについて無自覚だった川端の姿勢を指摘し、批判する声も少なくはない。

例えば、久道理氏の「少女小説・綴方・植民地主義——『美しい旅』と川端康成の戦時下——」（『川端文学への視界』21、二〇〇六年六月、銀の鈴社）は、川端が戦中に積極的に関わった「綴方運動」への関わり方や、それに関する発言に注目し、次のように問題提起している。

こうした評価（引用者注、川端が戦争に加担することなく距離を置いていたというもの）は、川端の言説に根拠があるにせよ、結局、川端の戦時下を「歴史性を欠く川端」という川端神話の中に収束させることにしかない。実際には綴方に関わる活動が進められていく中で、戦時下の言説への加担や葛藤が必然的に生じているのであり、川端の活動を歴史との関わりの中で捉えなおすことが必要であろう。

川端の戦時下の姿勢を、「歴史性を欠く川端」という川端神話の中に収束させるものの代表としては、久道氏もこの論文の中で紹介している柄谷行人の、『雪国』とは、他者にけっして出会わないようにするために作り出された「他の世界」である。ここでは、歴史的文脈でさえ消されている」（『歴史と他者——武田泰淳』、『終焉をめぐる』）一九九〇年五月、福武書店）のように、「雪国」が「他者」や「現実」を消去する装置であり、川端の文脈には歴史性が欠如しているという川端評価が挙げられる。また、それが広く受け入れられてきた歴史が存在する。

この久道氏の指摘の中で、特に注目しなければならないのは、川端自身が自分の姿勢に（無自覚）であることよりも、川端の言説をそのまま鵜呑みにすることで、従来の川

端評価が、川端のそうした姿勢を無批判に受け入れて来たという点だろう。

久道氏は、「植民地の「国語」教育にみられる「五族協和」の理想と植民地支配の実態との矛盾は、『綴方日本』にも色濃く反映している」とした上で、「この時期の川端の言説を見ていくと、川端は、植民地の日本語教育が他国の文化を抑圧する同化政策である点にきわめて鈍感である」ことにも注目している。

そして一方で、「戦時下の川端の文学活動には写実主義的な綴方観を貫くことによって、さまざまな形で戦時下のイデオロギーとの間に強い葛藤を生じている点に特異性がある」として、「川端自身は意図として戦争イデオロギーを否定していたわけではなかったにもかかわらず、文章に對する作家らしいこだわりという非政治的なものによって、戦争イデオロギーを相対化する契機が生じ、いったんイデオロギーとの軋轢が表面化した後は、最後まで信念を曲げることはなかった。植民地での教育活動の呼びかけなど、戦争加担の責任が明確なものもみられる川端の戦時下の活動にあつて、文体への信念が川端を国策イデオロギーへの無惨な加担からかうじて救っているのである」と、川端が明確な戦争賛美や体制翼賛に傾かなかった要因について、綴方という視点から考察している。

確かに川端は、積極的に戦争を賛美・称揚するような姿勢はとっていないが、それは久道の指摘するように、綴方運動の持つ方向性と当時の時流との齟齬によるものであり、川端自身が敢えて戦争に反対したというわけではなく、むしろ自分の発言がどのような意味を持つものかという点には無自覚であったということは、重要な問題であろう。

この点について堀内京氏は、「外地」メディアと小説―川端康成「東海道」の射程」（『日本近代文学会北海道支部会報』20、二〇一七年五月）で、川端康成の小説「東海道」が「一九四三（昭和一八）年七月二〇日から一〇月三十一日まで「満洲日日新聞」に連載」（『大連日日新聞』には一日遅れで掲載）されたことの意味を、「満洲日日新聞」というメディアがどのような性格を帯びたものであり、その読者層がどのような人々であったかという点に注目しながら明らかにしている。そこで堀内氏は、

「東海道」が発表された頃には、国威高揚のために和歌が利用され、源実朝の「山は裂け海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも」の歌が評価されたことに代表するように、和歌の働きも高まりを見せていた。多量の和歌を引用した「東海道」を「満洲日

日新聞」に連載した川端は、「東海道」を読むことで、満洲にいる日本人が「故国の風光を偲んでくれればよい」ということを述べているが、文壇のこのような状況を考え合わせた際に、この川端の言葉は、結果的に様々な問題を孕んでいる。

#### 〔中略〕

同時代のコンテクストをとりにおいて「東海道」を読んでいくと、当時の国威高揚に利用されていた「万葉集」の「万葉ぶり」を実朝の歌に見るという点において、川端の見方は他の作家たちと大きく変わりがなく、川端の見方は他の作家たちと大きく変わらないように思われる。よって「東海道」は「古国の風光を偲」ぶというような甘美な響きだけでは留まらない同時代性を多分に含んでいることができるだろう。

と、当時の時代状況を下敷きにした時、この頃の読者にとっては「東海道」が、川端の発言の範囲に留まらず、国威高揚の意味をも含むことを指摘している。

さらに堀内氏は、「東海道」には「地方」や「郷土」という言葉が頻出すること注目しながら、「東海道」には「内地」という土地に対する「思慕」や執着が色濃く描かれている」ことを指摘し、「忘れてはならぬ」「母国」

を「東海道」は体现するという働きを持った小説だ」と位置づけて、それまでの評価である「反戦文学という評価には収斂されない「東海道」というテキストのなかに組み込まれた同時代性に直面せずにはいけない」と、当時の時流や戦争には距離をおいたとする従来の「東海道」批評に疑義を呈している。

確かにこの頃の川端の発言には、明らかに当時の日本の国策である、「八紘一字」や「大東亜共栄圏」という発想を基盤にした発言がみられる。特に、それは(満洲)や(満洲国)の存在意義についての発言に顕著であるといつてよい。例えば、先にも紹介した川端の「渡満の土産」とされている『満洲国各民族創作集』(昭和一七年六月、創元社刊)の「満洲国各民族創作集」第一巻選者のことば(昭和一七年二月)には、次のような記述がある。

日本は今南方にも戦を進めたが、他の民族と共に国を建て、文化を興しつつあるのは、まだ満洲国の外にはないのである。大東亜の理想は先づ満洲に実践されたのであつて、ここになし得ぬならば、またどこにもなし得ぬと考へられるばかりでなく、これを漢民族と共になしつつあることも、満洲の重要な所以である。言ふまでもなく、漢民族ほどの優秀な民族は他にない

からである。文化の領野に見ては、尚明らかにさうである。現に満洲国は日本の大東亜戦争を賛助しつつ、自らを建設しつつあつて、私達は南方の華々しい勝利につれて、更にこの北方の尊厳を思はねばならぬのだが、とりわけ文学者などはこの意味の戒心が必要とする。南方の国に日本の多くの文学者が移り住み、その国の民族と共にその国の文学を創るのは、いつの日のことであらうか。今はこの書に結晶したところのものから、私達は踏み固めてゆかねばならぬ。(中略)

一旅行者としての私には、満洲国の文学について、仮に二つの考へ方があつた。その一つは、満洲文学の高遠な理想の問題である。国と共に新しい文学は、この国の作家達の言ふ通りに、あるいは建国の神話を創り、あるひは創世の歴史を導くことであらう。しかも五つの民族が共にそのやうな文学を興さうとしつつある。この処女地では、文学の意義も使命も非常に明らかに見えるやうであつた。

この後に川端は、「満洲文学の卑近な実際の問題」として「文学の発表機関が整備せず、市場が狭隘」であることによる弊害を挙げているのだが、それは文学における作者と読者、創作と批評の問題であるためここでは措くとし

て、右の「一つ」目に明らかなように、ここでの川端は、先の戦争が「大東亜の理想」を体现するためのものであり、その実践の魁として「五族協和」を掲げる「満洲国」が、「大東亜共栄圏」の模範であることを明言しているのである。

その中でも特に文学者こそが、「建国の神話を創り」、「創世の歴史を導く」ものであり、「その国の民族と共にその国の文学を創る」という作業を通して、「大東亜の理想」実現への大きな貢献をなしうる存在と位置づけているのである。そこにこそ「文学の意義も使命」もあるというのである。

その意味では、この『満洲国各民族創作集』こそ、「大東亜の理想」を実現する「文学の意義も使命」も担った成果であることを、川端は高らかに宣言しているのである。

これは、実際に満洲を訪問して触れた、在満の作家達の苦勞に感じ入ったの発言ではあるのだろう。しかしこれでは、いくら川端が満洲旅行を通して感じた「芸術的感動」を差し引いてみても、「私は戦争からあまり影響を受けなかった方の日本人である」とという言葉をそのまま鵜呑みにすることはできないだろう。

「大東亜の理想」実現と満洲に関する同じ趣旨の言説は、やはり満洲国での綴方の成果として著された『満洲国の私

たち』（大村次信編、昭和一七年一二月、中央公論社刊）に寄せられた、「満洲国の私たち」序」にも次のように記されている。

新しい国を建てた五つの民族の青少年が、自分達的生活記を綴つて、年鑑の文集を編むなどといふ美しさは、満洲国のほかに、現在世界のどこにあらうか。

この書は、ひとり日本人にとどまらず、大東亜の諸民族にも広く読ませたいと、おのづから考へ進むところにも、今日の日本がある。さうして、日本と戦ひつある敵国もまた、この書を尊敬しなければならぬ日は、やがて来るであらう。激動の世界のなかに、最も清純な象徴としても、この書は愛戴すべきである。

ここでも、「満洲国」を「新しい国」として、「五つの民族の青少年」が、「年鑑の文集を編むなどといふ美しさ」を称えている。もっともこの後で川端は、右の久道論で問題にされていたように、本書を「日本の綴方」の成果としている。その部分を引いてみよう。

新しい国の満洲で、特に戦時の今、青少年の精神と生活との重要さは、それがここに記録されたと言ふだ

けでも、おろそかには読めぬが、この年齢の純真、誠実、明快には、この年齢独自の表現が伴つてゐることも、見落としてはならない。つまり、日本の綴方の恩恵である。

日本の綴方の進歩は、世界に誇るべき文化的成果として、すでに知られてゐる。それが海を渡つて、満洲国でも、日系兒童の綴方が生育してゐることに、私はかねてから感動があつた。また例へば、満洲国の綴方使節などに見られるやうに、この日本の綴方は他民族の子供の心をも開発してゐる。

これは、純然たる翼賛的な言説ではないかもしれない。しかし、やはり、この時の日本の支配的な意識を踏まえ、「満洲国」成立の背景を考えるならば、純然たる表現の問題として、「日本の綴方の恩恵」を「満洲国」に見るといふことは出来ないのではないだろうか。

更に、川端のこうした内容の発言は、年を追ひ、戦争が進むにつれて、激しさを増してくるのである。二年後に刊行された『満洲国各民族創作選集 第二巻』（昭和十九年三月、創元社刊）に収められた「満洲国各民族創作選集 第二巻」序では、

作品を離れて文学者も文学者の会議もないのだから、大東亜諸国各民族の作品がこのような年鑑選集として先づ日本に出版されることを私は望んでやまぬが、そのさがけに満洲国の選集のあることは決して偶然ではない。満洲国の建国から大東亜戦争の今日に至る歴史が満洲国の文学の出發であり、存在であり、方向であつた。

満洲国の文学の負ふ運命的な意義と使命とは、大東亜戦争によつて更に壮高遠大となつた。日本とのつながりはなほ緊密になつたのみならず、大東亜全体のための文学といふひろがりも切実となつた。殊に私達日本人は、多くの日本民族がその国の国民として、その国の作家として、文化の建設に参じ作品の行動を興してすでに年を重ねてゐるのは、この満洲国であること、南方の苛烈な戦ひのなかにも忘れてはならない。各民族の協和が満洲国では文学者の作品に生活に与て課題とされてゐることも新に強く思はねばならない。

とあり、「満洲国の文学」の「運命的な意義と使命」が、明らかに大東亜の理想実現の実践場であり、戦争遂行のための大義とも関わっていると記されているのである。

こうした川端の発言は、当時、国家によって喧伝された



支配的な世論と一致するものであり、「満洲国」の建国や発展が、大東亜の民を救うことに繋がるといふ典型的な植民地支配者の論理に則っているものである事は、論を俟たない。

こうした「満洲国」の存在意義に関する発言以外にも、川端の意識を窺うものとして小谷野敦氏は、「戦時下の川端が、各民族が雑婚する世界を理想としたことはしばしば取り上げられるが、これは小熊英二の『単一民族神話の起源』（新潮社）をみれば分かる通り、当時の国策に沿ったものである。当時の日本は、朝鮮半島、台湾、樺太南部を自国領とし、満洲国を半ば属国としており、紛れもない多民族国家であって、それを天皇の下に一元化する八紘一宇の理念を持っていたのである」（第九章 戦争、最低限の協力）、「川端康成伝——双面の人」、註（4）に同じ）とし、当時の川端の結婚観が国策に則したものであったことを指摘している。

こうした「満洲国」および、日本による中国大陆経営の基本方針は、今更付け加えるまでもなく、欧米帝国主義の支配からアジア民族の独立を守ることであり、そのためには、日本によるアジア民族、殊に中国の教化・発展の必要性を強調し、日本による大陸支配を正当化しようとするものである。

これは明治後半からの、日本による大陸支配の正当性を主張する論調を基盤としているものである。例えば、明治三一（一八九八年）から同三二（一九九九）年まで発行された「東亜時論」（発行兼編集人 志村作太郎、発行 東亜同文会、第一号から第二六号まで。その後「東亜同文会報告」、さらに「東亜同文会支那調査報告」に継続）では、当時の表現で言えば「支那は保全すべき」という論調が支配的である。また大陸の利権を確保するために、特に日本の大陸支配において仮想敵とされたロシアに対抗するための具体的な施策の提案や戦略に関する論文、またそれを確実なものにするために執筆されたシベリア鉄道経営に関する研究などが並んでいる（6）。

川端の発想も、そうした明治期以降の基本的な大陸支配の理念と、それに基づいて建国された「満洲国」の経営方針に、「大東亜の理想」が加味されたものであることは間違いないだろう。

#### おわりに

以上のように、川端の「満洲国」への思いは、満洲訪問による見聞や体験に基づいた、日本人への共感や、そこに川端が感じ取った「日本の美しさ」の再確認によって得ら



れた「芸術的感動」の発露であると、まずは言うてよいだろう。しかしそれが、当時の「大東亜共栄圏」の理念と結びつくことで国策に追従することになり、「満洲国の文学」の「運命的な意義と使命」に関する国威発揚的な言及へと転換していく。問題は、そのことを川端が十分に意識し得なかったことにあるだろう。

ただし、その無自覚さを単に川端一人の個人的な資質の欠陥としてしまったり、いたずらに日本人の戦争責任の問題だけに収斂させるのではなく、冷静にその背景や原因を考えていくべきではないだろうか。そうでなければ、なぜ日本が先の戦争に突き進んでしまったのか。なぜ日本人が大陸や占領地で、あのような残虐な行爲を行なってしまったのか、などの原因の真の解明は成し得ないと考えからである。

さらにそれは、当時の時代状況や世論形成（誘導）という歴史や政治、あるいは社会制度や教育などの問題にとどまるものではない。むしろ太古から醸成されてきた日本人の意識構造や自我意識の問題も含め、日本人の精神・意識全般について総合的に考察すべき問題であると考えられるものである。

このことについては、今後さらに検討していきたいと思う。

## 註

(1) 現在の中国では、日本による「満洲国」建国を認めていないため「偽満洲国」と表記するが、本稿では日本の歴史的慣習に従い「満洲国」、あるいは必要に応じて「旧「満洲国」」と表記する。なお、「満州」の「州」は略称であり、正式には「満洲」である。川端もこれを使用していたことから、本稿でも「満洲」を使用する。

(2) 『川端康成全集 第二十八巻』（昭和五十七年二月、新潮社）。本稿での川端のテキストの引用は、全てこの「三十五巻本」全集による。以下紙幅の関係もあり、引用箇所の詳細は避けることとする。なお引用にあたり、旧漢字は新漢字に改めた。

(3) 川端の嘆きや憤りは日本の社会や国民だけに向けられただけではなく、そうした戦後の国民と癒着した米兵の姿や、出版に対する規制を強化していた占領軍の横暴とも取れる姿勢にも向けられていたことは、拙稿（「削除された「過去」／「過去」との〈再会〉——川端康成「再会」論、「解釈」39巻47号、二〇一二年一月）でも論じたので、参照されたい。

(4) 川端から妻秀子宛ての書簡は、『川端康成全集 補巻二』（昭和五十九年五月）に収録されている。ほかにも妻秀子が語った内容が、同全集の月報に連載され（原題「川端康

成の思い出」、それが単行本化されている（川端秀子『川端康成とともに』昭和五十八年四月、新潮社）。そこから川端の、旧「満洲国」での足跡や体験のあらましなどを知ることが出来る。さらに、全集の記述や新聞記事をはじめ各種の資料を丹念に渉猟・精査してその事跡をまとめたものに、小谷野敦・深澤晴美編著『川端康成詳細年譜』（二〇一六年八月、勉誠出版）があり、川端の満洲での行動も詳らかにされている。また、同じ小谷野敦『川端康成伝——双面の人』（二〇一三年五月、中央公論新社）も、当時の日時に沿って川端の満洲での行動や交遊関係を記している。

(5) 初出は、「新潮」昭和三十年八月号の特集、「昭和二十年の自画像」。引用は『川端康成全集 第二十八巻』（昭和五十七年二月、新潮社）より。全集の解題によれば、「志賀直哉、吉川英治、小泉信三、獅子文六、〔中略〕の二十五氏とともに発表された」とある。

(6) 例えば「東亜時論」第一号（明治三十一年二月）、同第二号（同三十二年一月）には、中野二郎「嗚呼満洲の山河」が連載された。続く第三号（同年一月）では、内田甲「露国裏面の大欠陥」・陸實「社交場の日清」・井上雅二「清国還都論」が、また同号の「雑録」の部には「西利亜鉄道鉄軌製造の設立と米国に至る新航路開始の計画」・「北清の三軍港」・「旅順大連の開放記」・「東亜における各国の勢力範囲（地図）に就て」・「都察院連名奏疏」などが掲載されている。さらに第四号（同年一月）には、内田甲「露国裏面の大欠

## 附記

陥（接第三号）、塩津誠作「列強の対清政策果して一致せざる乎」などが掲載されている（有山輝雄監修、加藤祐三解説、高木宏治編集『東亜時論』全三巻、二〇一〇年二月～七月、ゆまに書房 参照）。これらの論調が、川端をはじめとする文学者たちの意識とどう相關するかという問題については、「東亜時報」掲載の各論と文学者たちの発言の比較対照を行うべきであるが、すでに紙幅が尽きているので、ここでは触れないものとする。この問題の詳細な検討については、別稿に譲りたいと思う。

平成三〇年の八月から翌三一年三月の半年間、勤務先の創価大学から許されて在外研究を行なった。前半の八月から十一月は、中国吉林省長春市の吉林大学に滞在し、後半の十二月から翌三月までは、江蘇省南京市の南京師範大学を中心に滞在しながら研究を行なった。そのうち前半の吉林大学での研究期間において、旧「満洲国」のうちの吉林省・黒龍江省・遼寧省の中で、川端康成の尋ねた地の幾つかを辿ることができた。

この東北三省の長春・瀋陽・大連・ハルビンなど旧「満洲国」の主要都市では、現在も旧「満洲国」時代に建てられた建物が、政府の主要施設や大学の建物、病院や医療機関・各種の文化施設などとして活用されていた。また各地に旧「満鉄管理地」や「日本人街」が残っており、当時の

建物や街並みそのままに人々が暮らしていた。そうした旧「満洲国」時代の史蹟を目の当たりにすることで、僅かながらではあるが、「満洲国」当時の町並みに思いを馳せ、（内地）から渡った人々の暮らしぶりの一端をうかがい知ることが出来たように思う。それが本稿で触れた、川端の満洲に対する意識を考えるヒントになったことは言うまでもない。

受け入れてくださった吉林大学公共外国語教育学院の陳雲哲先生、長春市の旧「満洲国」の史蹟をご案内くださった上に、様々な資料を提供して下さり、さらに各地への視察のための便宜を図ってくださった、同学院副院長の傅羽弘先生。また暖かく歓迎し、滞在中さまざまにお世話してくださった学院の先生方と院生の皆さん。各地でお助けくださった皆様、様々お世話になった勤務先の皆様など、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

なお、後半の研究期間には、受け入れてくださった南京師範大学外国語学院東方言語学科長、林敏潔先生の主催する国家重点プロジェクト「日本民間反戦記憶に関する多分野研究」にも加わらせていただくことが出来た。その研究成果などについては、いずれ発表する機会があると思うが、林先生・季愛琴先生や院生の皆様はじめ、南京師範大学でお世話になった方々、そして同大学との御縁を結んでくださった、南通大学の成瑞先生にも、この場をお借りして、御礼を申し上げます。

（やまなか・まさき、創価大学文学部教授）